

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	苦しむ能力 : 子どもと詩心
Author(s)	川田, 靖子
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 56 - 59
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045073">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045073</a>
Right	
Relation	



## ■特別寄稿——子どもと詩心——

# 苦しむ能力

川田靖子

子供と詩心という題を頂戴して困惑した。

年令による詩心の区別などというものがあると考えたことはなかったからだ。詩心というものはおそらく刻印のようなものではないだろうか。あれほど詩の技巧に長け、あらゆる形式を自由にして、多産なること白色レクホンの如きであったユゴの壮大な全作品をもってしても、モードレールの苦渋に満ちた一行にはかえられないと云ったウルリストの言葉はその辺の機微にふれているのであろうし、またジッドがフランス最大の詩人は？ときかれて「残念ながらヴィクトル・ユゴ」と叫んだのも要は微妙な詩心のちがいをのべた本音なのであろう。

子供はまったく面白いものだし、その意外性は楽しいみものである。ときにその衝

動的な行為や卒直な言動は詩心に思いをはせさせる。しかし大人が勝手にこれは詩になっ

ていているなと思うことばも、語彙不足のために唐突な組合わせをとっさに採用したり（オチャワンネネのたぐい）礼節の欠如からであったり（カエルノオジサンキタヨ）する。詩というジャンルはきわめて強烈な意識を通過したものでなければならぬと私は考えるので自然発生的に「そういうえばオレは母音をしゃべっていたっけ」なんていうのはノーカウントにしたのだ。

子供を特別視するのは反対である。だから逆に詩心の原形をみとめることにもべつに反対はしないつもりだ。子供には未経験による無垢な部分があることも事実だが、それを神聖視するまでのこともなからう。

その根拠としては、潔白とは逆の悪の原形

も立派に備えているからである。三才になる一人娘を日々観察していると歯の浮くような性善説などとても信じられなくなる。まだ一才過ぎたばかりの頃から十分に嫉妬

心、羨望、けち、怠惰、残忍性がみとれた。「リカチャウカラ、ショウキヤクロニボイチャウカラ」大人はキョッとしてしまう。だが深刻に心配することもないのだろう。本当にそうしようと思っ

ていないらしい証拠には翌日はケロリとして当の相手と遊んでいたりする。ずるさにおいてもまったく大人と対等だと感じることもある。きつと叱責されると「チツチャンシンジャウカラ、サヨナラ」などと裏口から出て行こうとする。荷物をまとめて里

へ帰るわと云っている嫁さんとどう違うのか。

特定の年令、特定の状態を神聖視するのは間違っているのではなからうかと思われるもう一つの場合は母性愛で、これも絶対善なること神の愛にもたとえられることがあつてすぐたくなる。いつか車で遠出をしたとき、朝火事に行き合わせた。六時前という時間のせいもあつて近隣のおかみさんたちが民間アパートからネグリジェ姿で子供の手をひいて（避難のためでなく）夢中で見物にかけ出してくるのだ。それも一人や二人ではない。皆喜々とした面もちで、子供をせかしてお乳をぶらぶら波うたせながら間に合うように現場へかけつけようとしている。何のことはない、ふだんはエゴイズムの中心が子供の方へ移行しているだけの話で、一旦好奇心が露骨になると、火事場に逃げまどう老幼の姿など同情の対象になりもしないらしいのだ。そこには詩の中でたたえられた「お母さん」のおもかげも見られなかった。これは場末の風景だが、テレビのモーニングショーで一人っ子の問題が論じられていたときも、うちの子には盗癖があつて困つたなどという告白をする母親は一人もいなくて意地悪く云えば母親とは人前でこういうきれいごとしか話

さない人種だということを悟らせるための番組かと勘ぐれなくもなかった。

幼児の無垢も、母性の尊さもそれが全面であるとはとても信じられないし、幼時や、母となつた時に、特に詩心がこんこんと湧いてくるとも思えない。

しかし子供の頃を思い出していえるのは、悲しみや、苦しみや、とにかく目いっぱいであつたということだ。陣取り遊びの夢をよくみた。味方の陣地から一人一人仲間が消えていく、そして最後に自分一人になる。あまりにつらくて人に話せなかった。また日常生活で、自分一人に親兄弟の批難が集中する時期がある。そういうときにカードゲームの要領で次によい札がくばられてくるのを待つ間の長かつたこと。夕方一人で使いにだされてさびしさにたえられず友達を誘つたはよいが、子供会があると偽つてつれ出し、用は足したものの本当のことが云えず、ついに二重の嘘をついたことへの絶望的な自己嫌悪。これらは時がたつにつれて忘れられるという性質の苦しみではなかった。

長じて十七八才の頃、人並にハシカのよ

うな死にたい病にもかかつた。二三度失敗した後に、そういう状態についても少し自己観察してからでもおそくないという気

持になつた。人に話せばこっけいになつてしまふが、ひそかに「死にたいグラフ」をつけ始めた。熱計表のごときものである。日に数回時間をきめて、死にたい指数を記入するのだ。もちろんまったく主観的判断で基準をつくつた。たとえば0度は死にたくもなく生きたくもない、-2度は一寸死にたい。-4度は死にたいというふうな。ところがそのうちに面白いことに気がついた。

総じて空腹時とねむい時にはグラフの線も下降気味だということだ。もちろんいちがいにはいえないし、即物的と断じられても困るのだが。どうみてもこの傾向は争う余地がなく思われた。するとわれながら畜生の浅ましきの正体を見たような気がしてきて、こんな馬鹿馬鹿しい法則に支配されてふらふらつと死んでやるものかと思ふにいたつた。

どうやら私個人の詩心についての発想は現代的に語彙を材料として、字引や植物図鑑と首つびきの詩作とは千里も遠いところにあるとみえる。人からはどう見えようとも、何か苦しみや悲しみの細い糸が手繰られてくるのでなければ駄目なような気がする。

しかし、これは個人的な特別な例かもしれないのでごく普通の子供の観察例のべ

てみよう。

こういう精神の経歴をもつ母親にひきくらべると、わが子は幸いにしてごくノーマルなのではないかという気がする。あまり想像力はない。折紙とかぬり絵を好む。父親は折紙を一つも知らず、赤い紙をまるめてリッゴ、オレンジ色のをまるめてみかんしかつぐれない（めんどう見のよくない母親に育てられ、幼稚園へ行かなかった結果かもしれない）ので子供はあまり喜ばない。ぬり絵は安心感を与えるらしい。三次元世界を二次元に移しかえるということは案外高級な作業なのか、子供は絵をまねて絵をかくのは早い実物からスケッチすることは難かしがる。

音楽に関しては、歌よりも体の方が先に動く。悲しい歌、楽しい歌の区別は早くからついて、それに身ぶりをつけて踊っている。この頃になってやっとフランス語の歌は中味を知りたがるようになってきた。音楽は詩よりも直接的に気分が先立っているから、子供の反応も速い。歌のない曲ではショパンのマズルカを弾いてやると喜ぶ。どれも好きらしい。バロックではクローラの『葦』や『百合ひろくとき』は厭がらないが、バッハはひどく嫌う。思うにままりにも構築がしっかりしていて右手と左手

のテーマが対等に移行するので息がつかまるのではないか。それと永久運動的にくりかえすので、朝きくと晩までメロディがつきまどってしつこいらしい。歌の気分をつかむのが早いばかりではなく、たちどころに替え歌をつくる。歌詞の忘れたところをもっともらしく繕うのも不自由しないようだ。黒人の歌の「バケツは穴があいてるよ」をおぼえたの頃、お菓子をつくる道具がこわれて「ドウスル ドウスル」と問いかけると即座に「サツサトカエバイイジャナイノ……」と応酬されて呆れてしまった。

次に目につくのは芝居っ気である。寝る前にお話をせがまれて昔話をいくつもしてやったら、次の日こんどは遊びの中でその筋を、芝居に再現したがる（二才のとき）彼女流にはカルサニ合戦であったり、サルカニ合戦であったりするのだが、役柄をとりかえひきかえ、即興でやるのだから、毎日ヴァリアントがつくの不思議に筋はおっている。うんざりするほどつき合いをさせられ今になっている。

日本古来のお伽噺もタネがつき、三才のはじめからは、童話を読むこともはじめてみた。宮沢賢治は、はじめからうまくいっていた。

「オッベルと象」や「やまなし」「注文の

多い料理店」などはもっとも歓迎されて、最後のは早速翌日紙芝居を自分でこしらえた。小川未明の作品も言葉づかいの古風さにもかかわらず、喜んできいている。「月夜とめがね」「速くで鳴る雷」をとくに好んでいる。子供向けにというので、わざと易しく書きかえる必要など全然ないと思った。読みながら、あまり難しい言葉はかみくだいてやったこともある。絵本もいいのだらうけれど、馬鹿高くてつきあいきれないので、もっぱら文庫本を利用してはいる。たまたま同じ話を文庫本で読みかせるよりも絵本を好むという傾向はまったくみられない。

親馬鹿でかっこうのよいことばかり書いているのはフェアでないからもっとも低俗な好みについてもふれるつもりだ。親としてはどう考えたらよいのかわからないが、テレビのメロドラマがお気に入りである。この時ばかりは指をしゃぶりながらうっとりとしている。

「いよいよ旦那さまはご臨終で……ヨヨヨ」なんていうのは感にたえない顔をしてみとれている。テレビ局によく心得ておいてもらいたいのは年令的にはメロドラマは三才児にもっとも喜ばれているという事実だ。もっともテキはうわ手でその辺を基準

にこしらえているのかもしれない。すると低俗という評だけは少くとも逃れられることになるわけだ。

コマーシャルも好きでたまらないらしい。ニュースの時間になるとどこもかもニュースで困ってしまう。某局のように、コマーシャルなしの局があるからには、一つくらいコマーシャルばかりの局があってもよさそうなものではないか。第一にそのほうがもっとうかる。第二に視聴率第一位になること確実である。コマーシャル・ソングは傑作が多いし、テンポが早い。軽薄なだけにすぐおぼえられる。某局の一年ドラマみたいに、ひきのぼすために意味もなくザラッと波が寄せてはかえしという場面もないし、戦国時代の地図など出して講釈したりもしない。ラア・ホワイトを絵にかけばこんな顔にもなるかと思われる貧乏たらしいアメリカ娘の出でくるウイスキーの広告やら、ヘシモガナイ……という冷蔵庫の広告のマンガが出てくるとかつてのビートルズのファンもかくやと思われる金切声をあげて今にも失神しそうになるから処置なしである。メロドラマ、コマーシャル、マンガという好みは、往年イギリスの動物愛護協会で行なわれた犬猫の好むテレビ番組の調査結果と一致するようで（統計的な本

格的なものである）納得がいく。

私はこんな事態は少しも憂慮しない。低能でない限り卒業するにきまっているからだ。しかしこの頃一番右せんか左せんかと迷っているのは、テキがどこからか神様を仕入れて来たことだ。まだごく素朴な形でも「お花は神様がつくったの？」「神様どうもありがとう」のたぐいなのだが、はてどうしたものだろう。こちらが体の具合を悪くして苦しんでいると一心不乱に祈っているのを見るにつけても、「そんなものはつくりばなしだ」と云いきれない。さりとていったん教えこんでしまうと、これこそ一生卒業できないことになる。選ばれて救われたと手ばなしでノロケられるのはごく少数のしあわせな人間なので、幼時に植えつけられた信仰のために苦しみが倍加したという実感のほうが強いの。げんに私の父親はそれで一生を棒にふった。卑劣ではあるがかけがえのない一生だったのだ。加害者が牧師達であったということに対して神は何の責任もとってくれなかった。私については、もうそう簡単にはだまされたいだろう。しかし子供を巻きこんで苦しみの系譜にひき入れたものかどうか、私は迷っている。

## Olympia TYPEWRITER

ドイツ技術の粋と、クルップ鋼の誇りを  
内に秘めた“オリンピア”  
世界中の国々の、世界中の人々は  
深く限らない信頼を寄せています

### 西銀タイプ社 事務機械部

東京都中央区湊町 1-4 電話 03-551-0058  
相模原市相模台団地 3-7-504 電話 0427-44-8504

